

# 雨・月・太陽

生活の全てを自然に頼っていたアイヌ民族にとって、本格的な農耕は行っていなくても、人を含む全ての生き物を育む水分をもたらす雪や雨は生命を維持する上で重要な自然現象でした。日照りが



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター  
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

続けば雨を司る水の神の尽力に願いをかけて、雨乞いを行いました。雨乞いの儀礼の一つに亀の頭骨が使われていました。亀は水中に棲むため、水を司る神と考えられたからです。また、集落の守り神であるとされるシマフクロウの頭骨が亀と全く同形であることから、アイヌの伝説では亀とフクロウはかつて血を分けた兄弟だったのですが、人を見守る範囲分担が原因で不仲となり、能力比べをして勝ったほうが陸地、負けたほうが海に住むことになったそうです。亀が陸地にやってくるのは、たまには兄弟のシマフクロウに会いたいからです。

亀の頭骨を雨乞いに使う場合は、シマフクロウがすまう川上に向けて置きます。これは川上の山を棲家とするシマフクロウと協力して雨を降らせて欲しいという願いからです。

面白いのは、河川に棲む大きなカワカジカに煙草をつめた煙管を大きな口にくわえさせて吸わせ雨乞いをする方法があったことです。これもシマフクロウと関係があります。シマフクロウはアイヌ語ではコタンコルカムイ(kotan村korを掌握するkamuy神)ですが、カワカジカのアイヌ語名はシマフクロウによく似ているコタンコルチェッポ(kotan村の河川korを統治するceppo小魚)だからだといいます。カジカも水棲生物なので水を呼ぶということなのかもしれません。煙草を吸わせるのは接待の意味です。このような雨乞いの方法が伝わっているということは、相当に効果があったからでした。

太陽や月は男女の神に例えられました。アイヌの生活

では、火の神アペフチカムイ(ape火のhuci媼kamuy神)が女性であるように、主要な神の殆どはなぜか女神なのです。太陽や月にかかわる現象として、最も怖れられたのは日蝕や月蝕です。今ではこれ

は天体が重なって起きることは誰もが知っていて、恐がる人はいませんが、アイヌ民族も含め昔の人々は凶事の前兆ではないかと大変心配しました。

例えば、アイヌの場合、日蝕が起きると、太陽は意識を失っていきとし元の形に戻るように色々なことを試みました。大きな入れ物に水をはって捧げ、この水を飲んで太陽が意識を取り戻し、水鏡を使って自分の姿の様相を知るようにする。また意識づけに大きな音を立て、あるいは、歌を唱い舞ったりしたのです。藤村先生が昔、アイヌのお婆さんから教わった日蝕のときに唱える文句は、チュンカムイホ〜(cup太陽のkamuy神hoホ〜)、エライナホ〜(eあんたはray(意識が)死んだnaよhoホ〜)、エヤイヌパホ〜(eあんたはyaynupa気を取り戻せhoホ〜)のようなものでした。音を立て歌舞をするということは、古事記で天照大神が岩屋に隠れて世界が暗闇になったとき、アメノウズメノミコトが賑やかに歌い踊り、それにつられて天照大神が岩屋を開けたというお話に通じるものがあります。月蝕の場合も同様のことをして、早く月が元に戻るよう願ったものでした。

アイヌの人々は、自然界の異変は生活に直結していたため、些細な環境の変化を常に敏感に察知し、できる限りの対応策を講じて生き延びてきたのです。

科学技術の発達により、私達は自然の状態に気を配らなくても支障なく生活できているようですが、最近続く凄まじい大雨による被害をみているとそうとも言っていられなくなっているような気がします。

\*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長  
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のベカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~9』(北海道教育委員会、2008~2017年)等。